

帰路につき 扉を開ければ 魔王様

あたりめ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

気心知れた黒髪ロング角あり黒目ギザっ歯グラマラスさばさば俺っ娘魔王様と同棲して友達以上恋人未満の関係を楽しみたい人生だった……

なごかつ（@Katsupainter）様にイラストを描いて頂きました!!!

やだ：我が家の魔王様美人過ぎ…？

目次

帰路につき 扉を開ければ 魔王様	1
週末に 約束取り付け 笑い合う	14
お出かけし 笑いを絶やさぬ 魔王様	27
風邪を引き 看病慣れず 涙漏れ	40

帰路につき 扉を開ければ 魔王様

誰もが寝静まった深夜0時。

宵闇の中、唯一存在を主張する古ぼけた街灯を頼りに、黙々と帰路を進む。

駅から徒歩で20分。それは職場でのミスと予定している明日の作業を反芻しているとあつという間に経過する時間。

日頃の運動不足解消にもなると自らを騙し続け、少しだけふらつく脚をただただ運び続ける。

ほどなくして見えてくるのは吹けば飛びそうな2階建てのボロアパートである。

至る所に錆の見え隠れする古びた階段、その踏みしめる度に硬質な音を立てるステップを24段。コンクリートむき出しで掃除の行き届いていないフロアを、淋しげに佇む墓場の群れを見渡しながら12歩。そうして辿り着くのは表札もなく、汚れの目立つボロ扉。

その扉にあらかじめ用意していた鍵をさし、そして回す。

まるで帰宅を阻んでいるかのような若干の抵抗を力で無理矢理ねじ伏せ、ねばりつく夜の気配を鉄製の扉でシャットアウトして……ようやくため息が漏れ出た。

2K。20平米、築50年。家賃6万8千円の自分の根城に到着である。

玄関から数歩進めば辿り着くこじんまりとした居間は既に明かりが灯されており、そこには奇妙な同居人がTVを見ながらソファで寝そべっていた。

「んー、おふぁえり」

彼女は非常に気の入っていない声で片手を挙げて帰宅した自分を迎えてくれる。

数ヶ月前からこの家でなし崩し的に同棲し始めた彼女は、言っても信じないだろうが——異世界の魔王様である。

特徴的な、片方だけ半ばから折れた牛角に、蛍光灯の光ですら艶やかに反射する黒くさらりとした長い髪。

切れ長の目は白目の代わりに黒一色で、瞳に当たる部分が金色。目の高さや奇跡的な顔のバランスはそれだけで異国、いや異界から来たと言う証左になり得る。

勿論顔だけではない。すらりと長い脚。シミひとつない白い肌。出る所が出て、引つ込むところが引つ込むというモデルすらも羨む体型をした彼女は、こんな平素な空間にはまず以って似つかわしくない絶世の美女であった。

彼女が唯一この安アパートに似つかわしいのは、身につけたジーンズとラフなTシャツ（今日はデフォルメされたドラゴンの顔が大きくプリントされている）と、尚且つその口に咥えている塩せんべいぐらいだろう。

組んでいた長い両足を解いてするりと立ち上がった彼女は、仕事着のままの自分を素通りして冷蔵庫へ向かう。

途端に聞こえてくるがさがさと纏わりつくビニール袋と、ぱちぱちと反発する梱包プラスチック、その二種類の音。

恐らくはスーパーの惣菜を、魔王様は勝手知ったる手付きで電子レンジに放り込んでゆく。

最初は手間取っていた箸のレンジの操作も、その軽快な電子音を聞けば慣れ切っているのだというのがよく分かった。

「……んん？ 何突つ立ってんだ。早く着替えてきな」

ぼーっと見ていた所を咎められ、すぐに隣の部屋で汗をじつくりと吸ったスーツから着替え始める。

玄関を空けて彼女の姿を見るたびにどうにも未だに夢なのではないかと思ってしまう。

御伽話のように馬鹿げた、一笑に付されるのが関の山の愚かな妄想。

異世界で勇者に追放された女魔王が自分の家で生活しているなど、そんなの昨今のアニメもラノベも題材にしないだろうに。

「ほら、ビール」

しかし現実問題、魔王様はそこに居る。

着替え終わった自分に待っていたのは、冷えたビールだった。

彼女は投げ渡してきたのとは別に持っていたビール、そのプルタブを手際よく空け。そしてこちらに突き出してきた。

「よし乾杯。料理はもう少し待ってろよな」

かうん、とアルコール缶同士が間拔けな音を立てた後、彼女と示し合わせたかのように一息に煽る。

口の中を満たす苦味、喉を通る時のシュワシュワとした炭酸の感覚が先程の杞憂を洗い流してくれる。

ああ。こんな苦味しかない筈の液体なのに、最初の一杯だけはどうしてこんなに美味しいのだろうか。

「かつはああ……！ あ、……」 びーる。 ってのはやっぱり良いもんだな、この世界は色々好きな物が多いが、特にコイツだけは一番好きだ」

背を大げさに仰け反らせて喉越しを楽しむ魔王様、自分よりも遙かに速いスピードで飲み干した彼女は口周りの泡を舌なめずりして拭い取り、我慢出来ないと冷蔵庫からもう一つ取り出し始める。

そしてそんな彼女を尻目に、自分は季節外れのコタツ机の近くに座り込んだ。

彼女は魔王と言うくらいだから異世界ではやんごとない身分の持ち主であった。

故に親や執事にみっちりと礼儀作法を厳しく躰けられていたようだが、この世界に飛ばされてから彼女は一月と経たずして、世俗に慣れ親しんでしまった。

それはこの世界に従える配下も迫る脅威もないというのと、生来の性格が少しがさつである事も理由なのかもしれない。

飾り気のない電子音が居間まで届いたと思えば、ビールを煽りながら取皿やレンチンした惣菜を次々と持つてくる魔王様、あれよあれよと用意されて手伝う暇もなく、何だか申し訳なく感じてしまつて頭を垂れると、その頭をわしやわしやと撫でくりまわされた。

「んじゃ食べるか。今日は肉じゃがと特売コロツケ。で、明太じゃがポテトに刺し身だ」

食卓は気付けば瞬く間に埋め尽くされていた。

陶器製の取皿。余っているコンビニの箸。ビール。七味唐辛子、醤油、ケチャップに、なぜか芋づくしの惣菜達。

若干の偏りこそあるが、レンジで温められた食品から漂う芳しい匂いに、昼から何も食べていなかった腹がぐると唸りだす。

そして彼女が座り込んだのを見計らい、二人で箸を取り出して手を合わせあった。

いただきます。

「んむんむ」

流れっぱなしのTVから溢れる軽快なBGMと笑い声をバックに、盛り上がりのない夕飯が続く。

こたつ机、自分の座る位置から左斜め前に陣取った彼女は、ソファに背を持たれさせながら肉じゃがをついついている。

では自分は、とコロツケをつまんで皿によそうと「ん」と彼女がケチャップをよこしてくれるので、頭を下げて受け取る。

魔王にケチャップを取らせるなんて、本当に恐れ多い事をしている自覚がある。

そう思いながら半ば程使ったケチャップを折り曲げて中身を出している、なぜか彼女の半目がこちらを射止めていた。

「お前さ、まだ他人行儀が抜けないんだな」

金色の瞳に見つめられて言葉を詰まらせ、どうしたものかと考え込めば分かりやすく魔王様は溜息をついた。

視線とは別に彼女の箸が明太ポテトに狙いを定めているのが見える。

「前も言っただろ、ここはオレの城じゃなくてお前の城だ。そしてオレはお前の城に厄介になってる食客……いや、違うな居候だ。オレの身分なんて気にすんなって」

城にしてはこじんまりとしすぎた所である。

それにしても気にするな、と言われて気にしない人はあまり居ない。

小市民である自分には無意識に覇者オーラを振りまく魔王様に気軽に、なんてのは難しい。

「その魔王に料理まで用意させてんのに今更だな」

それはどうしてもそちらがやらせてくれと言うからである。大体が、こんなに遅くまで自分の事を待つ必要はないのだ。魔王様こそ自分の家だと思ってくつろいでいて欲しい。

何度となく繰り返した弁明を、彼女は興味がなさそうに木箸で半分にした明太ポテトを取りながら聞き流し、その瑞々しい桜色の唇を持つ口に放り込んでいく。

「オレは感謝してんだ。魔素がない世界でさ、行く宛がない中、怪我してぶっ倒れそうになったオレを介抱してくれたお前を。世界をたやすく崩壊出来る存在だとも知らずに介抱してさ、真実を知った後も居続けて良いって言うその度量にもな」

真剣な眼差しでこちらに告げてくれるその内容も、また何度となく聞いた内容である。

他ならぬ魔王様のような美女がこんな真摯な発言をしてくるのだ、その気がなくてもドキリとしてしまうのだが、幸いにも彼女が膨らんだ頬をもごもごさせながら喋っているのも、何とかなっている。

勿論彼女の言い分は分からはない。だがそれで他人行儀が抜けるかと言え、それはまた別の話である。

「頑固な奴」

魔王様は観念したかのように大げさに肩を落とすと、こちらのビール缶をひよいと掲げて重さを確認。そして粗暴な事にまだ残っていたそれをぐびり、と一息で飲み干して再度キッチンへと向かっていった。

裸足で歩いた時特有のぺたぺたという音に釣られて視線を向ければ、彼女の爬虫類めいた巨大な尻尾が重力に負けじと持ち上げられ、ゆらりゆらりと揺れているのが見えた。

彼女の尻尾は犬や猫のように機微に感情を表現はしない。いつも揺れているか、彼女の角と同じように魔法で隠されているかのどちらかである。

「大体な、オレがこうして遅くまで待つてんのはお前を労うためだ。宿代っつーか、恩義っつーか。それに」

またも冷蔵庫から取り出してきた追加のビール二本。それを手に持つ彼女は一本を自分に手渡してから先程と同じ位置にあぐらをかいて座り込み、もう一度プルタブを開けた。

「飯つてのは一人よりも二人の方が美味いだろ」

一足先に美しい喉を晒してビールを味わう彼女を見て。

確かに。一言だけ告げて、自分もつられてビールを飲んでゆくのだった。

§ § §

遅めの夕飯を終わらせた時点で、時刻は午前1時を回っていた。

今日はまだ平日である。本来なら朝に備えてそのまま寝るのが正しいのだろうが、流石に娯楽抜きでは味気ない。

故に『午前二時までは娯楽に時間を費やしてよい』と勝手にルールを定めており。魔王様もそんな自分勝手なルールに付き合ってくれている。

「おー」

本日の娯楽もドラマである。

見ているのは死者が生者を襲うという題材の内容。

ロングセラーでシリーズだけは無駄に多いそれは、死者から如何に逃げ延びるか、というよりかは生者同士のいさかいがメインになっているのだが、その辺りも含めて面白く。ここ最近毎日視聴し続けている。

ただの人間である自分には面白い題材なのだが、はたして魔物なんて見飽きているだろう魔王様は面白いのだろうか、と一度聞いてみたが、幸いにも面白いらしい。

曰く「こんな雑魚つちいモンスターにわーきゃー言つて騒ぐのが馬鹿っぽくていい」とか。どうやら異世界人はゾンビを脅威とも思っていないようだ。

とは言え連日の試聴会も少しだけ落ち着かない部分がある。

二人で見るのは良いのだがいつもいつも、いささか彼女と距離が近

いのだ。

小さなソファに詰めて座っているせいでどうにも肌が触れ合ってしまう。

だが彼女はそんな事を全く意に介していないし、ビール片手に映像に夢中になってるのだから、それを言い出す事もできない。

「わははは。人間って馬鹿だなー」

本当にそうだと思う。些細な事ですれ違って、些細な事で感情をぶつけ合う。

そして些細な事が気になって仕方がなくなる……反応こそ十人十色であるが、そんな人間であるならば誰しも思い描く感情は、魔王様にとつては「馬鹿だなー」で済まされてしまうのだろう。

自分にできることは、あまり意識しすぎないように彼女と同じく映像を見てビールを飲むだけである。

「……」

魔王様は、少し仄暗くした部屋でぴかぴかと光る薄い箱を熱心に見つめている。

ただ喉を鳴らす音と、TVの音声だけが満たす空間。

どことなく話すのも億劫になってきた時間の中、先に口火を切ったのは魔王様の方だった。

「お前さ、また”カイシャ”って所で何かあっただろ」

魔王様の顔はモニタに向けられたまま。そして自分の顔もまたモニタに向けられたままである。

こちらが応えずに居ると、こめかみの辺りを硬い物で小突かれた。地味に痛い。どうやら角でやられたらしい。

特にそんな事はない。

きっぱりと答えたのだが、魔王様はその答えが気に食わないらしい。

数回に渡ってコツコツとこめかみを角で攻撃してくると、ようやく顔をコチラに向けてきた。

「オレは精神の淀みが見れるって言ったろ。そんな真っ暗な淀み垂れ流してたら嫌でも嘘だって分かるっての。学べよな」

以前にも説明されたが相変わらずピンと来ない理由である。

精神に淀みがあったとしても恐らくそれは疲れのせいではないかと思うのだが、どうやら違うらしい。平常時は青灰色。何かあって沈んでいる時は、ソレこそ漆黒色になるとか。なるほどよく分からない。

「この前一瞬だけ愚痴ってた、”カチョー”って奴のせいかな？ そいつにまたなじられたのか？」

言われた瞬間、飲んでいたビールが不味くなった気がした。

そしてそんな自分の機微が分かったのだろう。確信を得た彼女は、こちらに更に詰め寄る。

「やっぱそいつ殺しちゃおうぜ。無理する必要ねーって」

あまりにも短絡的過ぎる結論である。

首を全力で横に振ると、彼女の美しい眉根が歪んだ。

「分からね。何で嫌な物を無理してまで我慢する必要があるんだ？」

オレの世界じゃそんな嫌な奴はすぐに殺してたぞ……あ、もしかしてあれか。お前より強いのか？ だったらオレが代わりに殺つてもいいぞ、顔と名前を教えてくれたらそれで済むから」

別に強さを問題視している訳ではない。

そもそもがこの世界では如何にムカついても人を殺してはいけない。そういうルールになっているのだ。

「だからバレなきやいいんだろ？ 魔法がない世界ならオレがやったなんて絶対に気付かねえ。不審死で終わるぞ」

バレなくても駄目である。断固として拒否し続けると。なんだよ、と膝を抱えて不貞腐れ始める魔王様。恐らくは元氣のない自分のために何かをしてあげたかったのだろう。

気持ちだけはとても嬉しい。嬉しいが、やはり殺人や暴力に訴えるのだけは駄目なんだ。と改めて伝える。

確かに嫌な気分になる時が多々ある。

心ない言葉に傷つけられ、心身共にへ口へ口になるまで酷使される事も多い。

だけどその対価としてこうして生活が出来ているのだ。

生きてる以上は仕方が無いことだし、また怒られる事に自分に一因が無い事もないのだ。

そこまで説明すると、膝の上に顎を乗せた彼女は何だか納得言っていない顔をしながらこちらをじっと見詰め、「立派なんだかよく分らん」と怪訝そうに呟く。

「謙虚なのは美德かも知れどさ、もうちよつと素直でもいいんじゃないかと思って思うぞ。そーやって仕方ないと割り切って何でもかんでも溜め込む姿勢、オレは理解できん」

魔物達は欲望に対しても忠実らしい。

そんな魔物を統率する魔王様はその立場故か、曰く魔界一の理性を持つまで成長したと豪語するが、日本生まれの自分とはやはり常識が違うように思える。

「溜め込んで、溜め込んで、ボロボロになるまで溜め込んで……それでどーするつもりなんだ？　ずっと吐き出さずにしまいこむのか？」

そんなの無理だろ。吐き出せよ。発散しろよ。すかつとしろよ」

彼女の重みが自分の左肩に徐々に徐々にかかっていく。

鼻孔に漂う淡く、そしてふわりと甘いシャンプーの香りが更に強まり。

接触した部分からはTシャツ越しでも分かる少し高めの体温と、女性として意識せざるを得ない柔らかな感触を覚える。

視界の半分が彼女の角と黒髪で埋め尽くされ、残る視界を占めるTVモニターには外をゾンビの大群で囲まれた部屋の中で、主人公たちが打開策を練っているのが見えた。

「もつと素直に生きろよ。じゃないとオレが心配になるだろ」

接触した肩を通して伝えられる魔王様の呟きは、自分には余りにも甘美な物。

無意識に伸ばしかけた手を努めて抑えて、これでも素直に生きていく方だ、と嘯くと、間近で彼女が振り向いた。

「どこがだよ」

割と好きな物ばかり食べている。

割とビールを欠かさない日々を送る。

割と娯楽がないと嫌だから睡眠時間削ってまで楽しむ、e t c. e t c. . . .

「……」

痛い。三度角^{みたび}で小突かれ、抗議するつもりで初めてこちらも振り向けば、至近距離^{まじき}で黒い眼^{まなこ}がコチラを覗いていた。

大きな瞳だ。いつも思うがとてもとても綺麗である。

まるで真っ暗な夜に浮かぶ満月のような……いや、形容できない美しさを覚えて仕方がない。

それを口に出して表現する事などまず間違いなく出来ないだろう。何せ自分にはその美しさを表現出来るような学もなく、美辞麗句を連ねるだけで終わってしまうだろうから。

……と、現実逃避をしても仕様がなない。魔王様の無言の攻勢に両手を挙げて降参の意を表明すると少し溜飲を下げたか、彼女は再度こちらに体重を預けてモニタに視線を向け始める。

「んじやなんか発散しろ」

発散。発散とおっしゃいますか。

「発散ついたらやりたい事をやるだけだろ。何かやりたい事ねえのか？ 例えばやろうと思っても忙しくて出来なかった事とかさ、あるだろう？ オレも付き合ってやるから言ってみろよ」

何か、あるだろうか。

やろうと思ってた事。やりたいと思っていた事。

昔は沢山あった気がする。あんな事をしたい、こんな事をしたいという気持ち。

でも昔の自分にとってはそのどれもが高く、遠い物であったから手を伸ばす事すら諦めてしまっていた。

しかし今は今で手こそ伸びるが脚が進まない。踏めてもせいぜいが二の足だ。

「ただ欲がないんだよ……悪魔も匙を投げるぞこりや」

呆れられてしまったので頭を高回転させてみる。

まるで古いCPUのファンのように唸り続けてみるのだが……駄目だ。

許しを乞うように視線をちらりと向けると、彼女のジト目がこちらを出迎える。

「オレだつたらそうだな。舐めた態度を取った魔物をぶつ飛ばしたり、暇潰しに山を消し飛ばしてみたり。あとアレだな、邪教徒がみんなちゃんとした願い事してきたら、ぷちつと潰しちゃうとかなー」

予想以上にバイオレンスでとてもではないが参考にならない。

首を左右に振りたくると、お前にやれって言ってるんじゃないやねえ、とお叱りを受けた。

「まあ、やっぱあれだな。やりたい事ないなら運動か。特訓とか修行とかな」

修行と言われるとピンと来ないが軽運動程度なら出来なくはないさそうだが、生来のインドア気質の自分である。運動は少し抵抗があった。

どうにかこうにかして別の発散方法がないかと模索する中、宛もなくTVモニタを見てみれば、劇中では一転して濡れ場めいたシーンに突入しようとしていた。女性が慕情を告げながら男性を組み伏せる展開。見ている側としてとてもとても気まずい。

「……あー、ああいう手もあるな」

どきり、と一際強く心臓が跳ね。発言の真意を伺うために恐る恐る視線を左に向けると、そこにはキラリと輝く犬歯を覗かせた魔王様の嗜虐的な顔がそこにあった。

とても妖艶で、ソレと同時にとても恐ろしく感じて仕方がない。

嫌な予感がしてこちらが制止を発する……その前に、彼女はしなだれかけた体を移動させ、流れるようにこちらの腰に乗っかっていた。そうすればこちらの視界は魔王様の嬉しそうな顔と、包み込んだ体に合わせてこれでもかと引き伸ばされてたドラゴン顔のTシャツで一杯になってしまう。

「シチャウか？ オレはお前なら全然構わないぞ」

細く、美しく、そして自分のよりも小さなその指先が、こちらの腹部をなぞる。

魔王様は完全に乗り気だ、熱を持つであろう部分に的確に体重を預

け。更に狙っているのかいないのか、Tシャツの胸元から深い谷間を見せつけてくる。

アルコールのせいかそれとも雰囲気のせいかな。上気して桜色に染まった彼女の顔は、間近で見てもまえば最後、本当に吸い込まれてしまうような魅力があった。

徐々に近づく魔王様の顔。背後で陽気に揺れている鱗のついた立派な尻尾。

彼女の爪がカリカリと小気味良く軋をくすぐって、こちらの理性的確に剥がしていく。

モニタからは一足先に艶やかな声が漏れ始めており、彼我の距離が0になる——その瞬間、

机の上に放置したスマホが周期的に振動をし始め、机と反発してガチガチガチと耳障りな音を立て始めた。

その音を切っ掛けに冷静さを取り戻した自分は、魔王様の両肩に手を置いて押し返し、ジョギングを始めようと思います。と勢いに乗せて告げた。

当初はきよんとしていた彼女も、すぐにふてくされた顔をしながら「そりゃ良い案だな」とこちらの提案を褒めてくれた。

「はあーあ」

諦めたのか腰に跨るのをやめた彼女は再度隣に乱暴に座り込み、そして先程よりも密着した体勢で体重を預けてくる。

割と乱暴過ぎて角が何度か顔や体に当たったが、そうされても文句は言えないので黙っておく。

どうにか跳ね除けられた事を内心で胸を撫で下ろしながらスマホを手にとって内容を確認すれば、それはただの迷惑メールであったようだ。が、今この時だけは差出人に感謝を贈りたい気分だった。

「自分で言い出した事だぞ。ちゃんとやらないと怒るからな」

不貞腐れて頬を膨らます魔王様はこちらの腕を胸に抱えるようにしてロックしており、その感触に心を揺さぶられながらも無言で頷く。

そしてしばらくの静寂の後、自分の為に色々と腐心してくれる異界

の魔王様に感謝の気持ちを伝えた。

「ばーか」

ソファから動けずに居る自分に、彼女の呟きの意味を理解する事は難しく。

垂れ流していたドラマでは例のシーンが既に終わっており、一点変わって新天地へ向かおうとする主人公らの姿が見れたのだった。

週末に 約束取り付け 笑い合う

「今日は早かったな」

夜中に近い宵の刻。お馴染みの古ぼけた扉をくぐった矢先、魔王様の声がこちらに届いた。

本日の魔王様はゲームを嗜んでおられるようだ。

ショートパンツにTシャツ（今日は白無地で、中央に「SO TI GHT」と大きく書かれている）というラフなスタイルで、あぐらをかいてTVモニタに夢中になっている。

相変わらずの彼女の姿を見れてどこか安心した自分は、ただいま一言返してから家に上がった。

魔王様は帰宅しても玄関までわざわざ出迎えてくれる事は少なく、また定番の「おかえり」がない事も多い。しかしながらそこに自分への労いが含まれて無いかと言えば、そうではないと言える。

何故ならば彼女は例えコントローラーを忙しく操作していたとしても、意識はしっかりと自分に向けてくれているからだ。

その証拠に、邪魔しないように部屋へと通り過ぎようとした自分の脚に、彼女の立派な尻尾がしゅるりと軽く纏わりついた。まるで「忘れていないよ」と言いたげなその行為はどこかすぐつたく。そして少なからず嬉しいものだ。

こういった細かな所作が蔑ろにしているような感覚を与えず、逆に淡泊な反応だとしてもわざわざ待ってくれているのだ、という実感を強く与えてくれるのだ。

一日の重荷をハンガーにかけ、部屋着に着替えて居間に戻れば、魔王様のゲームは依然として続けれられている。

薄型のTVモニタの中では魔王様操る甲羅に棘を生やした亀が、モーターカートを駆使してライバル達とのレースを競い続けている。

場面は既に最終ラップに突入している。彼女の順位は現時点で2位。デットヒートである。

前傾姿勢になり、「あっ」「くそ」「待て待て待て」なんて小言を言い

ながら、必要もないのにコントローラーをハンドルのように傾ける彼女。

魔王様の立派な尻尾は主の意思か、それとも尻尾そのものの意思か、それによつて展開が変わることなどないのに執拗に床を何度も叩いているのが見て取れる。

そして、眺めている間に決着がついた。

気になる結果は奮闘むなしく2位のまま。

魔王様はまるでその結末を認めたくないと言わんばかりに呻き声を上げながら後ろに仰け反り、そしてソファ越しに立つ自分を反転した体勢のままで睨みつけてきた。

「二位だぞ。どうしてくれる」

どうしてくれと言われても。

「……このステージだけ1位になれないんだよ。何かコツあるんだろ」

のけぞった体勢のままこちらに両腕を伸ばしてくる魔王様。何となしに近寄っていた自分は、その伸ばされた腕を跳ね除ける事もせずに掴まってしまう。

魔王という絶対的強者に掴まってしまったのだ、哀れな子羊は命だけはとアドバイスを送る他ない。

淡くこちらの服を掴んだ状態で真摯に俺の言葉を傾聴する彼女は、ある程度まで語ると「なるほど」と頷いてから拘束を解いてくれた。どうやら納得行く解答が出来たらしい。

「んじゃ雪辱は後で晴らすとして……飯にすつか」

見る者全ての心を解す笑みを見せて、ソファから飛び起きた魔王様。

そんな彼女に隣り合うようにして自分もまたキッチンへと移動する。

準備ぐらいオレがやるけど？　と言わんばかりの彼女の目に、今日は余力があると伝えれば、こちらの背中をぼんぼんと叩かれた。頼りにしているという意味であろうか。

——そうして、自分と魔王様は二人では少し手狭なキッチンに並び

立っている。

魔王様が手際よく冷蔵庫から取り出す惣菜を、こちらが小皿に取り分けて乗せていく。

時に電子レンジにいれたり、調味料や箸を取り出す作業もお手の物だ。

互いにやるべき事が分かっているため「ん」や「ああ」と言った簡単なやり取りだけで全てが済む。

ちなみに言えば我々の食事は大半がスーパーの惣菜であり、本日もまた例に漏れず惣菜がメインである。

それは自分も魔王様も料理には明るくないのが大きな理由である。自分は無理をすれば野菜炒め程度なら作れる技量しかなく。

魔王様はやんごとなき身分だ、料理はするのではなくさせた事しかないで言わずもがなである。

我々が唯一板についていると言っているのは湯沸かしと電子レンジ捌きぐらいだろう。

勿論、料理は出来た方がいい事に間違いない。

だが現代社会と来たらコンビニ、スーパーで格安で料理を提供してくれるのだから困り物である。二人共その恩恵に依存しすぎており料理技術は一行に育たないのであった。

閑話休題。物の数分もしないうちに我々は食卓を囲んでいた。

小さなこたつ机を瞬く間に占領した今日の主役達は、スーパーで買ったきんぴらごぼう、アジフライ。後は冷奴とチキンサラダである。

魔王様は並び立つ主食を見て目を輝かせ、そして有り余るような笑顔で片手に持つ缶（準備中も片時も離さずに持っていた）をコチラに寄せてきた。

乾杯。

缶同士を合わせる行為をお辞儀代わりに、まずは二人でビールを煽っていく。

口の中を瞬く間に満たす苦味の利いた液体。喉を流れる時の炭酸の感覚はやはり堪らず。

普段ならわざわざしない喉を鳴らすという行為を、意識的にしてまで味わってしまう。

本日の疲れを洗い流すかのように我を忘れて半分ほど飲んだ自分に対して、魔王様はこちらの目の前で缶を真反対に傾けて空っぽをアピール。雄弁である。

「なあなあ、ヒヤヤッコって醤油しかかけないのか？」

二人の箸が机の上をうろちよろする中で不意に魔王様が問うてきた。

自分は肉じやがの上に箸を着地させると、それを自分の皿に取り分けてゆきながら考える。

別に醤油以外をかけてもいいと思うが……冷奴は醤油であるという固定観念を持っているせいかなそれ以外はあまり思い浮かばない。強いて言えばポン酢や甘醤油くらいだろうか？ 何だか途端に湯豆腐めいたイメージが沸いてしまうのだが。

「何かこう味が足りないんだよな、醤油だけだとき。もつとガツンとした味付けにしてもいいんじゃないかねえかって」

自らの冷奴を箸でつつつきながら主張する魔王様は、イメージ通り繊細な味付けより豪快な味付けを求めるタイプである。

ドレッシングはたっぷり、調味料もどつさりと使用した料理を「んん！」の一言と共に目をきらめかせて完食する彼女のスタイルは見ていて気持ちが良いくらいであり。そんな彼女にとって味気のない豆腐はまさしく物足りないの極地なのだろう。

「ソース……いや、ケチャップ」

全く味の想像がつかない。

「やっぱりマヨネーズか。マヨがいいのか？」

その先は地獄だぞ魔王様。

大体が魔王様はマヨネーズを信頼しすぎなのではと思う。

マヨネーズと言う調味料の万能さは確かに凄いが、彼女はマイマヨネーズを用意するぐらいには中毒状態。そのうち直にマヨネーズを口に運ぶのではと薄々心配する程だった。

なんであれ挑戦するのは自由だ。

しかしこちらとしては醤油のまま食べさせて頂きたい。

「美味しいかもしれないだろうに」

ぷう、と頬を軽く膨らませた魔王様は空いた缶を手にとってキッチンへ。

そしてすぐに新たなビールと共にマヨネーズを用意すれば、それを彼女用に取り分けた冷えた豆腐の上にぶちまけていく。

粘性の高い淡黄色の液体がみるみるうちにとぐろを巻く様に最早言葉も出ない。コチラに出来るのは祈る事だけである。

「……変な顔すんな。食べる前から間違えてる気がするじゃねえか」

そう言ってたっぷりマヨネーズの豆腐を一口分だけ運んでいった魔王様。

動向の気になった自分は、その柔らかそうな頬がハムスターのようにもくもくと動くのを見つめていたが、思ったよりもその表情に変化はない。何だか不思議そうに味わい続けている。

「うーん」

たっぷり味わった筈の彼女の感想は、たった三文字だった。

そして口直しだと言わんばかりにドバドバにソースをかけたアジフライを口に運んで味わい始める。

今度は頬が綻んでいる事から、やはり先程のマヨ豆腐はそこまで美味しい物ではなかったようだ。

「別に不味くはねえよ不味くは。ほら、味わって見ろよお前も」

自分がいつまでも見ている事に気がついた魔王様はマヨ豆腐を箸で掴み、体ごと乗り出して口元に寄せてくる。

今にも落ちそうな不安定な豆腐もそうだが、毎度毎度急にパーソナルスペースを侵してくる彼女にドキッとさせられてしまう。

その美しい顔に、目の前で重たげに揺れる双房。そして女性特有の仄かに甘い香りに意識を奪われそうになりながらも、努めて無表情で口を開ければ、割と大きめの豆腐が舌の上に軟着陸した。

豆腐独特の弾力といったばい的大豆の味。そこにマヨネーズの酸味と甘味が絡みつく。

これは……うーん。

「だろ？」

まだ何も言っていないが我が意を得たりとしたり顔の魔王様。しかして彼女は急にこちらの唇のフチを指でなぞり始めたではないか。

すわ、何事だと思えば、その指にはマヨネーズが付着しているのが見えた。どうやら口についていたらしい。

「コレに関しては醤油の方がいいよな」

そして彼女は指についたマヨネーズを真紅の舌で猫のように舐め上げ。

自分は同意も否定も出来ずに少し固まってしまっているのであった。

§ § §

夕飯を終えた自分と魔王様が次に行ったのは居間のソファで二人陣取り、そして互いにコントローラーを握りしめてレースゲームに興じる事であった。

先行するは自分が操る配管工のオヤジ。彼女の操る棘あり亀より順位は3つ上。

魔王様はライバルの密集するS字カーブゾーンで言葉にならぬ吃音を漏らしながら悪戦苦闘。どうにかこうにかこちらとの差を縮めようとしている。

「待てっ、待て待て待てずるい！ ずるいぞ！」

NPCが放った雷が、他全キャラクターに舞い落ち。そして当たったキャラはスリップをしだす。

こちらも被害を食らったが魔王様の被害は特に甚大だ。ジャンプ台から飛び出した瞬間の直撃でコースアウトになってしまっている。

「あのアイテムは嫌いだ！」

更に画面にのめり込んだ魔王様のボタン捌きは激しくなる一方。

ことレースゲーにおいてボタンの連打は必要はないのだが熱くなっている今では聞き入れられる事はないだろう。興奮のせいかな、先程から彼女の尻尾が頻繁にこちらの背中を叩いて地味に痛い。

レースは瞬く間に最終LAPへと突入していた。

魔王様との差は依然として開いたまま変わらず、モニタから流れるエンジン音に隣に座る魔王様の唸り声が混ざりあっているのが聞こえてくる。

そんな魔王様の執念が実ったのだろうか、彼女に千載一遇起死回生のチャンスが訪れた。

「――来たー！」

一時的に無敵状態になれるアイテムを手に入れたのである。

無敵に加え、更に加速までした彼女は徐々に、いや着実にこちらとの差を縮めていく。

ぬおおおとコントローラーを派手に傾かせて猛迫する魔王様。すでに場面はゴールライン直前のストレートゾーンである。

自分のゴールは秒読みで、彼女との差は気付けば僅かになっていた。

そしてついに。

彼女のマシンがこちらに接触すれば、ゴール手前で自分のマシンはクラッシュ。

魔王様は土壇場のクラッシュを尻目にゴールラインを悠々と越えていった。

「いよおしっ！ 勝ったぞー！」

画面に映る1位の称号に諸手を挙げて喜ぶ彼女は、その溢れんばかりの喜びのまを抑えきれず、にまーつと輝かんばかりの笑顔でこちらに勝ち誇ってきた。

そんなアピールに素直に称賛を贈れば、魔王様は鼻高々。祝杯と言わんばかりにビールを煽り始める。

「つかあ、美味い。勝利した後だから尚更美味いなー！」

慣れた手付きでこちらの肩を何度も叩いて喜ぶ魔王様だが、実の所このレース勝負、既に5回目の挑戦であった。

彼女は負ける度に「今のは違う」「偶然だ」「まだ負けた訳じゃない」などと再戦を望むのでその都度付き合った結果がこれである。この泣きの五戦目で彼女は初勝利を飾ったのだ。

だと言うのにまるで全ての試合を制したかのように振る舞う魔王様は、中々に良い性格をしている。これが魔王様の魔王たる所以か。ビールを飲みながらも如何に自分のプレイが優れていたか、そして如何にこちらのプレイに粗があったかを懇懇と説明しだす魔王様。それならばもう一度再戦をと提案したら「もう十分やったから今日はいい」と断られてしまう。

どうやら今日の勝負も魔王様の勝ちで終わりのようだ。

「そう言えば明日ってお前、休みだよな」

んん？ とちびちびとビールを飲みながら壁のカレンダーを見やれば、確かに今日は金曜日。明日は休日である。

多忙であつたため曜日感覚が完全になくなっていたがそうか、土曜日か。

そう考えるだけで今を無駄にしたくない気分が芽生えてくる。ならば夜更しして映画でも見ようか、などと伝えてみたが、意外にも彼女は首を振った。珍しい、一体どうしたというのだろうか？

「映画はいいんだけどさ。明日がせっかく休みって言ったらどこか遊びに行こうぜ」

ふむ、それもまた良いかも知れない。

頷きながらいそいそと映画配信サイトにつなげようとリモコンに手を伸ばした所、その手をペしりと叩かれた。痛い。

「その肯定とも否定とも取れない曖昧な発言やめろ。遊びに行くのか行かないのかどっちだ」

コチラの顔を間近で覗き込むその顔は少しだけむっとしている。

白黒はつきりさせたいのは山々だろうが、とは言え明日までまだ時間があるのだ。

優柔不断な自分のためにももう少し考慮させて貰いたい。そう伝えたのだがやはりまだ気に入らないらしい。

魔王様はいきなりこちらが飲んでいたビールを奪うと、それを一息に飲み干し。少し酒臭い吐息で抗議してきた。

「お前さあ、そう言って曖昧な返事で先延ばし先延ばしにして『今日は一日中寝る』って事に何回なった？ オレは忘れてねえからな。動物

園に行く約束だったのにやっぱやめたーってなった事」

何回も何も1回だけだと記憶しているしあれは確約していなかった筈だが、魔王様の中では辛抱ならない裏切り行為と認識されていたらしい。

魔界出身の魔王様は変身能力で何とか外を出歩く事も出来るのだが、人間界との常識の差から一度やらかして以来、近所のスーパー以外では自分と一緒に出かけなければならないと言う約束をしている。

そのため、平日は買い物以外は日がな一日中部屋で過ごす他ない彼女からすれば、その一回の反故でも許せるものではないようだ。

「だから今オレと約束しろ、明日はどっかに出かけるって事を」

おや。自由意志だった筈なのになぜか強制へと変わっている。

だがそれを咎めようにも最早魔王様の中で遊びに行くことは決定事項になっているようだ。この決定は今更覆る事はなさそうだ。

出不精なため本来なら家でだらだらしていたいが、腹を決める他ないらしい。

そうなると動物園リベンジか。はたまた水族館か。

あるいはゲームセンターか。遊園地というのも手かもしれない。

魔王様はアグレッシブなお方だ。ショッピングよりはレジャーを好む筈。

「お？ いいんだな。ならオレはあそこに行きたいぞ。スカイウォークタワー」

しかして意外な事に彼女が提示したのは、まさかの日本一高い遊覧スポットである。

動物園はいいのか？ と聞けば動物園は明後日行くからいいらしい。

こちらもまた決定事項である。魔王様には抗えない。

しかしあそこは騒げるようなスポットではないが、どうしてそこに行きたいんだろうか。

「オレが四六時中暴れ回ってるような言い方やめろ。知ってると思うがオレの居た世界ってのはこっち程文明が発展してなかったんだよ」ソファの背もたれに体を預け、頭と角を重力に従うがまま傾けた彼

女は、天井を眺めながら語り始める。

聞けばそちらは魔法文化はかなり発展しているように認識していたが。

「魔法だけな。その代わり発展に不可欠な科学や天文学と言った他の学問は蔑ろにされ続けていた。だからえーっと、そっちでいう……」
「チューセイ」？ レベルで文明は止まった。いかんせん魔法に依存しすぎたな……人間も魔物も、不思議な事が起きても全て神秘に依る物だと片付けて、思考を停止しちまった」

曰く、異世界人は魔法という不確定な事象も「神とか超越者がもたらした不思議な物である」と理解とは到底言えない状態で完結してしまっているらしい。

故に、人々は魔法という恩恵に預かりながらその文明レベルは目覚ましい発展を遂げなかったようだ。

「だからオレはこっちの世界に来て驚いた、だってこの世界には魔法なんてないんだろ？　なのにドラゴンよりでっかい建物がうじゃうじやと林立してやがるんだぞ」

両手を使ってこんなにも大きいんだぞと表現する魔王様。

彼女の美しくもすらりとした腕が示す空想のビルは、自分には思ってたよりも小さく見えた。

「分かるよな？　で、だ。その中でも滅茶苦茶でかい建物に登りたくなっただ。あれって実際に登れたりするんだろ？」

顔は動かさず目だけコチラに向けた彼女に頷き返せば。にい、と魔王様は笑った。

明日の予定は決まりである。ただあらかじめ言っておけば、あのタワーは非常に眺めのいい景色こそ眺められるが娯楽要素は少ない。

恐らく眺めるだけ眺めたらそのまま帰ることにはなるだろうが、それでもいいのだろうか。

「は？　登ったら上から飛び降りて遊べるんだろ？」

え。

「ああいう高い所って空を飛んで見れたりするんだろ？　オレは知ってるぞ」

魔王様は至極真面目そうな表情で何言ってんだお前とツツコんでくるが、突っ込みたいのはこちらである。

その情報源はどちらからと聞いたら「この前見た映画だ」と言うありがたい答えを頂いた。

それはチョイワルオヤジ達が破茶滅茶する映画で、確かにとあるシーンでは高層ビルの屋上から飛び降りていたが……あれはあくまでフィクションである。

努めて冷静にそんなアトラクションは実際にはないのだと伝えると、最初こそ冗談はキツイぞとこちらの頬をつついて笑っていたのだが、やがてこちらが表情を崩さずに居るとようやく理解してきたらしい。一点して顔に朱が混じり始めた。

「……知ってたぞそれくらい。今のは冗談だ」

しばしの沈黙の後。魔王様の口から零れ出たのはそんな言葉だった。

魔王様は頑なに非を認めない事が多い。

魔界で一番えらい身分だったせいなのかもしれないが、非を認める＝負けであるというイメージを持っているようだ。生来の負けず嫌い気質も相まって中々どうして認めてくれない。（勿論本当に悪いと思った時は謝ってくれるのだが）

「なんだその顔は。何か文句があるのか」

文句なんてあろうはずがございません。と首を振るうが、頬を赤らめ恨めしそうに睨みつけてくる魔王様がどこか子供のように見え、つい自分の意思とは裏腹に少しだけ頬が引き攣ってしまい、そして案の定見咎められた自分は魔王様に襲われた。

「だ、大体お前が映画見てた時に、ああいうのいつかやってみたいなあなんて言うからだぞ！　それでオレはてつきり出来る所があるのかと思って……！」

こちらに覆いかぶさり、首根っこを掴んだ体勢で魔王様の顔が視界を埋め尽くす。

前と同じように肉感ある彼女の肢体が薄い布越しに感じられると正直たまらないのだが、怒りにかまけた彼女は知ったことではないよ

うだ。密着した体勢で怒りのままがぐくと揺さぶってくる。柔らかい。だが世界が揺れる。ここは天国と言うべきか地獄と言うべきか。

「お前があん時にちゃんと説明しなかったのが悪い。いいな！」

衝動のままに揺さぶり続けた彼女は、気が済んだのかこちらをソファに投げ捨てると、指を突きつけてそう宣言した。

正直理不尽に思わなくもないが他でもない我が家の魔王様の命令である。こちらとしては特に文句もない。

彼女はこちらに異論がない事を確認してからもぷんすこ、と怒っている様子を崩さず、机の上のリモコンを引ったくり、慣れた手付きでチャンネルを変えていく。

チャンネルは映画配信のものへ。そして彼女のお気に入りであるB級アクション物の映画が放映され始めた。

「……」

部屋には訪れる再度の静寂。

魔王様は胸の下で腕を組んでむっとり顔。

自分も何を切り出したらいいのかも分からず、ひたすら視線をモニタに注ぐ他なかった。

映画の中で主演男性二人組が、悪の組織のたくらみに気付くシーンが写されているが……正直内容に集中出来ない。そして映画がいざ戦闘シーンにさしかかった途端。「スカイウォークタワーだけどき」と魔王様が切り出し始めた。

「屋上から飛べなくても明日。行くからな」

画面の中で二人組の警官らが悪漢をたちどころに吹き飛ばしているのを尻目に、本当にいいのかと問いかけたが、彼女の返答はない。無理をせずとも他に行きたいところがあれば優先してもいいんじゃないのだろうか。そう提案しようとした矢先の事だった。

「……本当はお前と一緒に空が飛びたかった。でも出来ないならそれでもいい。一緒に空から見下ろすだけでも楽しいかもしれないからな」

映画のアクション音声に負けそうな程か細い彼女の発言に、ようや

く自分は合点がいった。

この世界に来てから、魔王様は今まで培った魔法技術を全て禁じて生活している。

恐らくは恩義ある自分に迷惑をかけたくないが故なのだろう。彼女は何かコチラの生活に馴染もうと努力してくれている。

しかし、普段息をするように使っていた魔法を禁止する。それは少なからず彼女にストレスを与えるのだろう。

そんな中でようやく見つけた魔法が役立つ瞬間。魔王様は心踊らせた筈だ。

だが、その願いは叶わなかった。

現実には神秘を必要としない社会構造をしている。

彼女の魔法はやはり、この世界では発揮させる場所がなかったのだ。

そう考えた途端にどこか不貞腐れたように語る彼女の寂しそうな雰囲気が見えなくなってしまう。

自分の口から堰きを切って飛び出した返答は、自分でも驚くような声量で「絶対に行こう」と言うものであった。これには魔王様も自分も驚いてしまう。

「分かったよ。そんなに張り切りすぎんな」

だが二人して驚いた後は、二人して笑う番である。

どちらから始まったか分からない含み笑いの連鎖の中、約束を交わしあった自分と魔王様はようやく。流れている映画に没頭することが出来たのだった。

何気なくソファに投げ出された二人分の手。

それは手の甲同士を触れさせたまま離れることも重なる事もなく。合間合間に感想を言いながらも二人の夜はとつぷりと更けていくのだった。

お出かけし　笑いを絶やさぬ　魔王様

「おーっただいまー！」

お馴染みの古いアパートの扉が開け放たれ、魔王様の声が二人分の足音と共に家中に響き渡る。

本日は仕事漬けの平日と違い、解放の休日であり。

そして約束をしていたお出かけを堪能してしてきた帰りであった。いつも自分が発する側だった「ただいま」の言葉を、二人で揃って言える事がどこか嬉しい。

酔っ払っているせいか自分だけ勢い余って「おかえり」まで言ってしまう、魔王様に「応！」と頭をわしゃわしゃされて、なんとも言えない気分になってしまう。

壁にかかった時計を見れば時刻は既に23時を過ぎている。

朝から出かけたのではぼ丸一日かけて休日を楽しんできた事になる。

日頃だらりとしているよりかは遥かに有意義に使った感じはするが、その分疲労も濃い。

肩と頭に少しだけ重さが乗った感じを覚えながらふらふらと居間へと移動していけば、そんな自分の横を颯爽と魔王様を通り過ぎていった。

そして、どすん。と言う音が響けば、魔王様が目の前のソファに墜落していたのが目撃出来た。

「うおうおうおうおう」

平素な四角いクッションに顔を埋めて右に左に忙しそうに柔らかな感触を楽しみ始める魔王様。両足をばたばた、尻尾もうねうねびちびちと全身で何らかのお気持ちを表明しておられる。

今の彼女は中々に酔っ払っており、そしてご機嫌である。

それもこれも道中浴びるほどお酒を飲んだせいだろう。

ご要望の日本一高い建造物に登ってからお昼御飯（お酒込み）。買スカイウォークタワーい物をしたら夕飯目当てで居酒屋。二軒目はバー。三件目もバーと、常にお酒がついて回った一日であった。まさしくぎるの如く飲んで

いた魔王様だが、あの量はいくら何でも大丈夫なのか心配ではある。一応お水でも飲むか、と聞いてみたが「大丈夫だぞ」と間延びした声が帰ってくるだけで、彼女のクッションへの奇行は止まることはなかった。

ちなみに本日の魔王様は外ゆきの格好をしている。

白のデニムパンツにオフショルダーの紅梅色のリブニット、そしてジャケット。

その自身の美貌とスタイルも合わせれば洗練されたモデルのようにしか見えない彼女は、街でも強く人目を引いていた。

とは言え今ではそんな美貌も格好も形無しである。だらけるならせめてジャケットは脱いで頂きたい。

「え〜？　しょうがねえなあ〜」

気の抜けた返事と共にえっちらおつちらとジャケットを脱ぎ始める魔王様だが、まるでソファと同化しているかのように芋虫のように蠢くばかり。埒があかないので近寄って脱がすのを手伝え、シャンプーだけでは説明出来ない淡く甘い香りと、少しだけお酒の匂いも漂って来る。

ジャケットが脱がされていく過程で頭あたまになる首筋や肩を見れば、部屋の明かりに照らされた彼女の肌が平時よりほんのりと火照って桜色になっているのが分かる。それが余りにも色気を感じてしまうのだから……兎に角とてもよろしくない。

「ぬーげた」

その声にハッと現実引き戻された。

既に彼女のジャケットは完全に外されており、魔王様はクッションを横抱きにしてソファで寝転がり始めていた所だった。

よろしくない。自分も少なからず酔っ払っているのかもしれない。ジャケットをハンガーにかけてから自分も外ゆきの服から軽く着替えてゆく。

彼女は要らないと固辞するかもしれないが後でお水を飲ませよう。

部屋着に着替えた後、そのままキッチンに移動して二人分の水を汲みながらそう思考する。

……それにしても予想以上に忙しく、そして思った以上に二人ではしやぎ回った一日だった。

普段以上に魔王様のテンションが高かったのは間違いなかったが、それは今にして思えば彼女の数少ない外で遊ぶ機会だったからではないのだろうか？

魔王様と一緒に出かけた事はそこそこあるが、そのほとんどが近所のスーパーへの買い物だ。

こうして遊ぶためだけに出かけたのは数えるほどしかなかった。

そう考えた途端に申し訳なく思えてしまう。

仕事に忙殺されてしまっていたからか、全然気が付かなかった。

自分が魔王様に限りなく不便を強いている事を。

世界の違い故に行動が制限され、そしてこの8畳二間の城で缶詰を強いてしまう事を。

……今度から、もっと一緒に出かけに行こう。

魔王様の見たいモノを、遊びたいモノを。

この世界だけにしかない体験をさせあげよう。

気がつけばコップから溢れてしまった水を止め、何が楽しいのか未だソファでゴロゴロとソファに戯れ^{じゃ}ついている魔王様の元へと戻る。

彼女のすぐ傍に^{ひざまず}跪いてコップを差し出せば、クツションに顔を半分以上沈めた彼女の金の瞳がこちらを見つめ返してきた。

「お酒？」

お水です。

「別に大丈夫だっていったらるお」

念の為ですよ、と近くのテーブルに彼女の水を置いておき、そして自分は魔王様が占領するソファの直ぐ側に座り込む。

自らのコップを軽く傾けて喉を潤してゆけば、思った以上の清涼感を覚えた。

こちらこそそこにお酒が回っているようだ。

「……」

しばし、壁の時計が秒針を刻む音だけが部屋の中を満たし続ける。自分は魔王様の方に体を向ける事もなく、電源のついていないモニ

タを眺め続けていた。

黒一色の味気ないモニタは居間の電球の光を反射して、だらしない体勢で寝転び続ける魔王様と、その傍で神妙な顔で座り続ける自分を写している。

液晶越しに見る魔王様は寝転がった体勢のまま、ただただ自分の方に視線を注ぎ続けているようだった。

『色々と窮屈な思いをさせてごめんなさい』

『今度からもつと一緒に色々な所に遊びに出かけましょう』

ただそう告げるだけでいいのに自分は何故沈黙しているのだろうか。

肝心の言葉は尻込みしているのか、喉の奥から出てこようとしてもやしない。

それは魔王様が一日の余韻を楽しんでいるのを崩したくないというのと、謝罪なんか求めていない彼女に『そんなの気にするな馬鹿』で一蹴されるのが目に見えていたから。

そして今更窮屈させた事を謝る自分があまりにも愚かで、何よりも意気地なしであるからだろう。

このまま黙り込んで良い訳はない。

肝心の一步が踏み出せない臆病な自分を心中で叱咤し、既に乾き始めていた喉をもう一度水分で潤す。

そして勢いのままに言葉をつむごうとしたのだが——結局自分の口から飛び出たのは、陳腐を極める「今日は楽しかったですか」の一言であった。

「んん……勿論楽しかったぞー」

すると衣擦れの音と共に、すぐ耳元で彼女の甘い吐息が届くものだから、ひやつとしてしまう。

瞬時に振り返れば魔王様の顔が目と鼻の先に近寄っており、コチラの反応を見てかんらんかんらと華のように笑っていた。

「タワー、すっこかった。予想以上だったぞ。あんなでっかい棒と板切れをぺたぺたくつつけたような建物でさ、間近で見ると、見上げても見上げても頂上が見えねえ。スカイドラゴンなんて目じやなかつ

た」

顎の下で手を組み、うつ伏せになった体勢で目を瞑って思い出す魔王様。

確かに彼女の興奮は、タワーに近づけば近づくほど指数関数的に上昇していったのは見て取れていた。

タワーを飽きるほど見上げ、中に入ってその洗練されたデザインに感嘆の息をつき、ぐんぐんと速度を上げて上昇するエレベーターに少し不安げにし、展望室に辿り着いてからは周りに居た子供と一緒に様々な場所をうろちよろしては、見渡す限りに続くビル群れや階下を豆粒のように動き回る人間達を、自分が声をかけるまで飽きずに眺め続けていた。

「あんなものを魔法なしに作れるなんて、人間ってやつは凄いんだなーって思い知らされたぞ。オレの家もあんなでっかいタワーにしちまいたかったな」

魔王様の家？

「お。そういや言ってなかったな、オレの家は魔界の奥の奥。瘴気満ちるダークシャドウマウンテンって所の頂上にある城だ。割とでっかいし、それなりに豪華な家だと思ってるぞ」

ダークシャドウマウンテン。格好良い名前ですね。

何となくだが洋風のお城で常日頃真っ暗で、かつ定期的に雷が落ちていそうなイメージがある。

「よく分かったな」

あ。ドンピシャでしたか。

「瘴気ってのはどうしても強ければ強いほど空気を淀ませていくんだよなー。だから太陽がさしてても周りが暗くなる。それで瘴気の塊があるところには何故か雷が落ちやすいんだよな。朝から夜までうつせーのなんの」

てつきりラスボス感溢れさせるためにわざとやってるかと思ったが違うらしい。

それにしても魔王様の家の中はどうなっているのかが気になる。豪華な調度品が沢山置いてありそうだ。

「あるぞあるぞー、お歴々の魔王の彫像とか絵とか飾ってあるしなー。勇者から奪った装備品コレクションとか！」

あとは幹部専用の超でっかい円卓とか、意味の分からん即死トラップ部屋とかもあるぞ！ と鼻高々に語ってくれる魔王様。

とても見てみたい気はするが即死トラップの部屋は勘弁して頂きたい。

そもそも瘴気とやらの普通の人間が耐えられるのかと聞いたら「結構鍛えれば耐えられるらしいぞ。耐えられなかったら魔物になる」らしい。多分お宅訪問は死ぬまで無理だろう。

「はははは、そもそもあつちにはもう帰れないしなー」

その言葉を聞いた瞬間、しまったと思ってしまう。

世界から追放された彼女が元の場所に戻る事は現状では不可能。

だと言うのに無神経な事を口にしてしまった、と後悔した直後。こちらの髪がぐしゃぐしゃとかき混ぜられてしまう……見透かされたのだろうか。

「その後のお昼ご飯も楽しかったな。」ソバ” って言うんだっけか？ ウドンとかラーメンとかと違って素朴だけど美味かった。啜る^{すす}っていうのはどーにも慣れないけどな」

昼食は魔王様自らお選びになった立ち食い蕎麦屋に入ったっけか。お店なのに立って食べるという所がツボに入ったらしい。笑いながら入ったその店で、この世界で遭遇した4つめの麺類（他3つはパスタ、うどん、ラーメン）を注文。

最初は上品に啜らず、パスタのように頬張って食していた彼女だったが、自分や他の客が啜って食べているのを見て困惑し。そして恐る恐る真似をしていたのが印象的だった。

「それで面白い物だよな。山のように商品が置いてある建物の中に、人が本当にゴミみたいにいっぱい居るつてのは面白かったが……まあ疲れるな。暴れちや駄目だと思うと息がつまりそうだった」

魔王様の手は自分の頭に置かれたままだ。乱雑だがゆっくりと髪を撫で回している。

まるで親戚の子供をあやしているような、そんな撫で方。

少しだけ納得いかないような思いをしながらも手を振りほどかずにこちらとも思い出す。

休日のデパートに入り込んだ魔王様の第一声は「うげっ」という如何にもな声であった。

そこは見渡す限りの人の山である。

電車で移動する間も人の多さに辟易していたのだ、コレは少し可哀想な事をしたと今更ながら思う。

だがデパ地下に突入して、様々な惣菜や物産品の試供品を片っ端から楽しんでいく彼女の光景は中々に見応えがあった。

魔王様は喜怒哀楽が激しい。口に合うものと合わないものでこれでもかと表情の差が出てくるので、見ているこちらまで感化されそうになる。（とは言え、店員さんの前で不味いな！と口に出すのは辞めてほしい）

「あとはずーっと飲み屋だったか、今日はたらふく飲めた感じがするなー」

買い物の後、お酒も飲めて夕飯も楽しめる場所と来たら居酒屋だろうと、自分と魔王様は二人で様々な店をはしごしていった。

チェーンの和風居酒屋から、個人経営のオイスターバー、そして普段なら滅多に行かないような雰囲気あるBARの3件。

魔王様は待つてましたと言わんばかりに各店を楽しんでおられた。

チェーン居酒屋で様々なつまみを一通り食べながらビールやハイボールをがばがば飲んで。

オイスターバーでは様々なつまみを食べながらワインをぐびぐび飲んで。

場末の寂れたBARではバーテンダーに作って貰った手作りカクテルを目を輝かせながらもたっぷり飲んでいた。

その飲みっぷりは見ていて本当に驚かされるものだ。

酒豪ってこういうモノなんだ、と感心してしまうくらいには彼女の杯を空けていくスピードが速い。

つられてペースを早めてしまう危険性は過去の体験で分かっていたので、自分はと言うと各店舗最大2杯までを目安にセーブしてい

た。

だが結果としてトータル7杯は飲んでる。どうにも飲みすぎた気がしてならない。

「いつも缶で飲んでたからジョッキで飲むと格別だった。あれだな、キンキンになるまで冷やしたジョッキとビール！ 感動だった。同じビールでもあんなに味が変わるなんてな！」

「ワインも良かった……ぶどう酒はオレの世界でも作ってたが純度が違う。つまみの貝とか、シチューと一緒に食べるとたまらん」

「カクテルつーのも面白かったな。」ばーてんだー”がカシャカシャカシャーって振ってき、色んな色の酒作ってんの。酒の種類があるにあるのも驚いたが、オレの注文を聞いて好みの味にしてくれるのが楽しいな。味も美味いし」

クツシヨンをかき抱きながらころりと転がる魔王様、その表情は確かに幸福が満たされている。

今もそうだが、大好きなお酒に囲まれているせいか飲み屋にいた間、魔王様はずーつと上機嫌だった。

様々なお酒を飲み比べては「こっちの方が良いな」と笑い。

つまみを食べては「これも美味いぞ」と笑い。

まだ見ぬ地球の常識を知って「なるほどなあ」と笑い。

そして何でも無い話に興じあつて「わははは」と笑う。

それが如何に小さな内容だとしても、まるで満開の花が咲いたような笑顔を見せてくれた。

だからだろうか。そんな彼女の姿が見れるのが何よりも嬉しくて。

自分も柄にもなく色々な話題を振っていた気がする。

……今後もそういった彼女の顔が見れるように頻繁に出かける事を誓おう。

自然な流れが出来たのでいざ、と尻込み続けていた言葉を伝えようとしたが、魔王様の話はまだ終わってはいなかった。

「あ。でもお酒よりも何よりも楽しかったのは、お前の反応だったな——」

自分の反応？

「3件目の酒屋の事だよ、ほら。あの静かな場所で色々飲んでたら隣に座ってた男が話しかけて来ただろ」

確かに、会社帰りのサラリーマンのような男が魔王様に話しかけていた記憶がある。

その男性の目的は世間話ではなく露骨な程にナンパ。

美貌故に彼女に惹かれてしまうのは致し方ない気はするが、あまり愉快な男ではなかった。

視線は魔王様の顔だけでなく、その体をねっとりとい回り回っており、連れの自分など見向きもしてない感じであつたから。

「あいつ、オレの体をじろじろ見てきやがってさあ。何度その目玉えぐってやろうかと……あ、冗談だからな。マジでやらねえよ、お外だし騒ぎは起こさないって!」

駄目ですからという目を向ければ慌てたように取り繕う魔王様。

しかしその話でどうして自分が出てくるのだろうか。……ああもしかして。

「そんであんまりにもあんまりな目線に見かねてそろそろ一言言おうと思つたらさあ、お前がグラスを机に強めに置いて『彼女にそんな目を向けるのやめて貰つていいですか』って言い出したじゃねーか。あん時だな、オレが今日一番面白かったのは」

……やっぱり。

確かに露骨な目線と態度、そして自分をひけらかす行為が不愉快だったせいかな、そんな言葉を投げかけてしまった記憶がある。グラスを強めに置いた記憶はないが。

「お前、あん時怒ってたんだよな? 見られてたのはオレだつていうのに、オレの代わりに怒ってたんだよな? マジトーンの声で静かに怒ってたから、オレびつくりしてたんだぞ」

そう、なのかもしれない。

「いやーそれで相手もなんだテメエと来たし、お前も無言で椅子から降りて臨戦体勢だからどうするべきか迷ったぞー。結局は”ばーてんだー”、だっけか。ソイツに冷静に諭されて終わってたけどさ」

あの時は結局お酒に酔っていたのもあつてか、割とブレーキが効か

なかった気がする。

場馴れしていたバーテンダーが居なければどうなっていた事やら。何であれ、あれは少し恥ずべきだったと反省している。反省しているが……。

「あん？ 何だお前、拗ねているのか？」

……拗ねてはいない。

例え面白いと言われても別に。なんとも思っていない。

「あははは、いやあ悪かった悪かったって、でも面白いのは事実だから仕方ねえだろ？ 滅多に見ないお前の表情が見れたんだ、得したと思ってるくらいだ」

酒臭い息をかけてきながらこちらの肩を揺さぶる彼女に少しだけ頭に血が登ってしまう。

この怒りとも恥じらいとも言えない感情は表にするべきではないのは分かる。

だが魔王様の為に怒ったっていうのに調子を変えずに茶々を入れてくるのだから、もやもやした気持ちはどうしても出て来ってしまう。だって言うのに、

「まあそれはともかくとして——ありがとな。アタシの代わりに怒ってくれてさ」

出て来たそばから、これである。

裏表のない彼女の言葉を耳にただけで、自分の制御できない感情というのは瞬く間に霧散してしまったではないか。

代わりにこちらの脳裏を瞬く間に占めていく感情は照れ一色である。

違う意味で頭を上っていく血を抑えようと、机に置いたコップを手に取り一息に飲み干すが、駄目。熱を持った何かは脳裏を占領し続けており、居ても立つても居られなくなってしまうえば何故かその場を立ち上がってしまう。

もう寝るべきだ。一日歩き続けたしお酒もしこたま飲んだんだ。

魔王様も風邪を引かないように早く服を着替えて、お布団で寝よう。

彼女の顔は努めて見ないように早口で捲^{まく}し立て、足早に彼女の元から去ろうとしたのだが……不意に自分の手に何かが絡みついた。

自分の体温よりも熱いその何かは強烈な力でこちらを引き寄せてきて、あれよという間に自分の重心が崩れてしまい、その結果。

——ぎしり。自分は、ソファの上で魔王様に抱きすくめられていた。

彼女の細腕はこちらの手に重なって指先をしつかりと握りしめ。彼女の両足はこちらの脚と交差するように絡み合って、解けそうにもなく。

彼女の胸部はこちらの胸に潰れる程押し付けられてなお柔らかく。彼女の顔面はこちらの鼻先とおでこがくつつくほどには近づいていた。

視界いっぱい広がる、魔王様の金色の瞳。

規則正しく、それでいて静かに吹きかけられる彼女の吐息はやはりお酒の匂いと、食べた肴の香りがしてくる。

彼女の体温の高さは服越しでも如実に感じ取れ、温かい、と言うよりは熱いくらいで。

お互いの鼓動が不規則にビートを刻みあい、歪なテンポを作り出しているのがはつきりと分かった。

「ありがとな。オレに色々奢ってくれて」

そして永遠にも思える程の静寂の後、唐突に彼女は告げ始めた。

「ありがとな。オレ好みの所に優先して連れてって貰って」

手を握りしめる力が少し強まる。両足が更に深く絡み合う。

「ありがとな。オレのワガママを色々と聞いてくれて」

自分と魔王様の間に隙間がなくなる。鼓動の音がより確かに聞こえてくる。

「ありがとな。オレのために時間を割いてくれて」

おでこどころか、頬が触れ合い。そして擦れ合う。

「ありがとな。オレを助けてくれて」

そして頬に朱の入った彼女がへにやり、と破顔しているのが見えた。

1つ1つ。ゆつくりと積み上げられていった感謝の言葉。

思いもしなかった彼女の気持ちを改めて伝えられた事で、自分は改めて理解する。

ああ魔王様と出会えて本当に良かった、と。

彼女の裏表のない性格が、その人柄がどれだけ自分の救いになってきたのかと。

空虚に会社に通い続ける自分にとって、どれだけ魔王様が大事な存在なのかという事が。

そして胸を満たす暖かな気持ちが生じると広がれば、気が付けばあれだけ躊躇っていた言葉もするりと溢れ出ていた。

『こちらこそ、自分と出会ってくれてありがとう』

『今度からもっと一緒に色々な所に遊びに出かけましょう』

謝罪は要らない。感謝があればいい。

だから前の言葉から少しだけ内容を変えて。

我が家の魔王様にそう伝えたのだった。

すると突如背中に回された腕がこちらを引き寄せ苦しいくらいに抱きしめられてしまう。

「ばーか」「感謝したいのはオレの方なんだぞ」「嬉しいけどさ」なんて、少し力が入っていない言葉で耳元で呟いてくるのだからそれが堪らず。自分もまた彼女の背中に手を回して思う存分抱擁を楽しんだ。

背中を撫で、頬を擦りあい。そして堪能した後、ゆつくりと顔同士を離す。

今の暖かな気持ちと、自分の思いを再確認してしまえば、もう躊躇いはなかった。

目を瞑り、穏やかな顔を向ける彼女の唇に吸い寄せられるように、こちら唇を寄せてゆき――

「……」

――その穏やか過ぎる呼吸に、おやと思ってしまう。

ひよっとして、ひよっとするのだろうか。

まさか、今のこの流れで彼女は……と思って、ふと声をかけてみたが案の定返事はない。どうやら本当に眠りについてしまわれたようだ。

これには大いに拍子抜けしてしまう。この胸の高鳴りだけではどうにもこうにも収まりそうにもないが、意識のない相手に行う程自分は人の道を外れてはいない。

こうなってしまうえば今の自分に出来るのは、魔王様の健やかな眠りを妨げないようにするだけ。

そう考えて静かに彼女の拘束を解こうとしたのだが……これがまた解けない。腕も脚もがっちり固定されてしまったかのようにロックされて、うんともすんとも言わないのだ。

狭いソファの上で二人で抱き合いながら眠る。

非常にロマンチックであるが、一人だけ意識がある状態で取り残されるのは存外に辛い。

柔らかかつ強固な抱擁の中、自分の忍耐力を試されるような試練が今まさに始まろうとしていたのだった。

……これは余談ではあるが。

彼女は自分を抱きすくめている間、一度も目を覚まさず穏やかに眠り続け。

自分は緊張のあまり一睡も出来ず。解放された同時に眠りについた。

お陰で、日曜日に約束していた動物園は延期になってしまい、魔王様の機嫌を損ねてしまうのだった。

風邪を引き　看病慣れず　涙漏れ

直接脳を響かせる甲高い電子音。

今の今まで霞^{かすみ}めいた世界でまどろんでいた自分の意識が、強制的に覚醒される感覚。

こちらの都合を全く考慮しない高音は鳴り響き続け、自分は暗闇の世界の中、慣れた手付きで音源——スマホを手元まで手繰り寄せ、それを止める。

今の今まで火のついたように鳴きわめいてた癖に、指先1つでシレっと沈黙するコイツには起床時限定で殺意を覚えて仕方がない。怒りをぶつけるかのように布団をかぶり直し、たつぷりと伸びをし……そして理性が本能に勝った所で布団から這い出る。

窓辺に映る明るい空と小鳥の囀^{さえず}りの音は、清々しいを通して最早憎たらしい。

普段以上の気だるさを覚えつつものつそりと部屋を出れば、布団を敷いてリビングで眠る魔王様とご対面である。まだ春先だというのに薄い毛布一枚だけで眠る彼女の眠り顔は、それが威厳ある魔王であることを忘れる可愛らしさがあった。

あどけない表情で眠る彼女を起こさぬようにゆっくりと洗面台へ向かい、シャワーを浴びて、歯を磨き、ヒゲを剃る。ルーティーンとも言ってもよい朝の儀式。それを物の三十分程度で終わらせた後に待ち受けるは朝食の準備である。

献立は冷奴、インスタント味噌汁、漬物にご飯、目玉焼きぐらいと予想を立てればいざ台所へ。脳内でタスクを整理しながら1つ1つを無心でこなす。これもまた慣れきったワークである。

タイマーセットした炊飯器の中を覗き。

無事に炊けている事を確認して。

電子ケトルに水を入れてお湯を沸かし。

同時にフライパンを温めて目玉焼きの用意。

冷蔵庫から卵と漬物。そして豆腐を出して。

それが終わったら一旦魔王様を起こす。

それから、それから。それから――

命令せずとも勝手に動く手足に任せ朝食の準備を進めていく、その矢先の事だった。

あ、と思った時には自分の脚はもつれ、そして思いっきり転んでいた。

響く鈍い音。視界の中では大量のお星さまが瞬き、頭部から全身を伝った痛みに、その場で悶絶してしまう。

ああもう駄目だ。始まったばかりの1日の全てにケチがついてしまった。

憂鬱な平日の朝、ようやくエンジンがかかって来た所だと言うのに何をやっているんだ自分は。

鬱屈した気分の中、頭を抑えて起き上がろうとした所で急に自分以外の力が働くのを感じてしまう。

「おい、大丈夫か？」

我が家の魔王様である。

先程まで寝ていたはずの彼女が何故か自分の元に来ていた。

「お前な……あんだだけ派手な音を立てたら誰だって起きるぞ」

ぐいと強めの力で強制的に立たされれば、彼女の指先……少しひんやりとしたそれがそつと患部であるおでこを触れていた。

途端に響く鈍い痛み。コチラの表情からそれを察した魔王様は、次の瞬間には指を離していた。

「血は出てねえみたいだけど赤くはなってるな……こりや、そのうち腫れるな」

顔面に集まっていく血の感触。

しげしげと患部を眺め続ける魔王様はこちらの気も知らずに視界を占領し続けている。

彼女は心配だからこそうしているのだろうか、魅入ってしまった自分に取ってこの状況、大変嬉しくもあり地獄でもあるのだ。

起きがけで艶のある黒髪がいつも以上にボサつとしていたり、黒い眼が片方だけが二重になっていても魔王様の魅力は全くと言って損なわれておらず。逆にその粗野な部分がこちらの琴線を刺激して仕

方がない。

何よりも着崩され過ぎて肩が露出しているTシャツの着こなしに、根本まで見える眩しげな太ももが余りにも余りにも目の毒で……いや待て。太ももが何故根本まで見えるのだろうか？

「あ？ 暑いから脱いでただけだ。今更恥じらうなって」

魔王様は熱がりである。

環境変化に強いせい肌着だけのスタイルを好み、真冬でもなければ中々厚着をしたがらない。だからたびたびその御素肌が見えてしまうという事態が起こりうる。

自分の頭の痛みもさておき、彼女に着替えを促しながら全力で離れようとして——ふらつく。そしてふらついた所をまた支えられてしまうのだから世話がない。

一言謝罪しながら努めて視線を反らしていたのだが、唐突に彼女の冷えた手がおでこに触れた。

痛みのせいか熱を持った頭部に、彼女のきめ細やかな手は心地がよいが、どうして二度も触れるのだろうか。彼女のはしたなさを咎める事もできずにじつとされるがままで居ると、彼女の口から「やっぱり」と呟きが零れ出た。

「お前、熱あるぞ」

おお？

「顔が全体的に赤くなってるし、何か体がだるいとかないか？」

……言われてみると若干の倦怠感はあるように思える。

だが同時にこれから始まる仕事への忌避感だとも見受けられる。

強いて言えば普段よりはその感じが強いだけか。

ぼんやりとした頭で出した結論は「気の所為」であったのだが魔王様はそうは思わないらしい。

返事も顧みずにこちらの腕を引いたと思えば次の瞬間にはソファに座らされ。そしてはしたない格好のままどたと部屋を駆けていった。

どうやら戸棚の1つに飛びついていているようだが……急にお菓子でも食べたくなったのだろうか。それならばその戸棚には入ってな

いのだが。

助言しよう迷っていると、魔王様は次の瞬間には赤十字のマークが入った桐箱を両手に抱えてこちらに来ていた。救急箱である。先の発言はしないで本当に良かった。

ほっとしたの束の間。眼前に無言で突き出されるのは体温計である。

視界にデカデカと映る丸みを帯びた端子、その奥では魔王様の不満そうな顔がこちらを見つめている。

彼女の気迫に気圧されるがまま、それを脇に挟み検温を始めていく。

検温するのは吝かやぶいではない。

ないのだがせめて魔王様には着替えて欲しい、このままでは目の置き場がない。

だが彼女は結果が出るまで動くつもりはないようだ。

自分は遠慮がちな電子音が響くまでの間、目を逸らしつつ沙汰を待たなければならなかった、

「結果は」

はい。37度5分です。

「……それっていつもより高いのか？ 低いのか？」

人間の平気的な体温は36度くらいなので高い方だと思われます。

「そうか。じゃあ今日は休め」

……休め。休めと申しますか魔王様。

確かに常識的に考えると休むべき体温かもしれない。

だが今日は大事な会議と今日中にやらないといけない作業が色々目白押しだ。休むわけにはいかない。

第一熱は熱でもこれは微熱だ。この程度の熱ならば平時とほとんど変わらない。

「なあ。オレはこの世界の常識には疎いが……カイシャって奴は病人にも無理矢理仕事をさせるような所なのか？」

持論を展開したのだが魔王様の視線は冷ややかになるばかり。

この質問も正直どう答えるべきか迷っていたが、こじれるのもあれ

なので素直に首を左右に振っていた。

「であるなら休むのが普通だよな」

そう世間一般的には普通だ。間違いないだろう。

だが時には無理をしなければいけない時もある。

翌日以降の仕事に差し障りが出てしまうし、回りに迷惑がかかる。だからこそ休むべきではないのだが……。

「だが」も「しかし」もないんだよ。体調が悪くなったら休むんだ」

自分の理論は、残念ながら魔王様には通用しなかった。

魔王様は強情だ。一度コレと決めるとテコでも曲げない。

彼女の中で既に休む事が決定しているので、いきなりこちらを抱えて寝かしつけようとする始末。

これには自分も抵抗せざるを得なかった。

だいいちこのぐらいの熱なら自分でも移動出来るし、自分が如何に会社に行かねばならないのかを再三に渡って説得したのだが、意を介してくれる程魔王様はお優しくはない。とうとう自分は重力から解放され、彼女の腕の中でお姫様扱いをされてしまう。これは余りにも恥ずかしい！

「お前さあ目的がずれてるぞ。何のためにお前は仕事してるんだ？

お金のため、ひいては生活のためだろ？」

かき抱かれながら部屋を移動する間、まるで親が子を叱りつけるかのように淡々と彼女が説く。

居間から壁1つ隔てた部屋までは大した時間もかからず、自分はどうとうベッドにまで戻されてしまう。

「それは言ってしまうえば自分のためだ。違うか？　なのにどうして自分の不調を無視する。優先するのは自分であって仕事じゃないだろう。無理して頑張った結果倒れたらどうする？　死んだらどうするんだ？」

それは、確かに一理あるかもしれない。

だがこんな微熱程度で死ぬは言い過ぎでは。

「うるせえ。兎に角休まないと殺す」

背中に感じる柔らかなマットの感覚。そして同時に伸び掛かる辛辣なお言葉と羽毛布団。

柔い羽毛の海に若干溺れそうになりつつ、その海から脱した所で、コチヲを見下ろす魔王様の表情にようやく気付いた。

眉を弱々しくハの字にして、真剣な眼差しでこちらを見据えているその顔は、こちらのことを真に心配しているのに違いなく。

そしてそんな顔を見させられてしまえば最早反論など浮かばう筈もなかった。

もう観念する他なさそうだ。傍らのスマホに手を伸ばして会社に連絡を入れる。

コール音とともに湧き上がる罪悪感、それを抑えつけながらも休みの項を伝える。

話している間胸が痛くて仕方がなかったが、いざ報告を終えて電話を切った瞬間どつと解放された感覚が湧き上がった。

「よし。じゃあ今日は一日中寝てろよ。今日は何もしちゃ駄目だからな！」

一連の行為を見てようやく満足げに頷いた魔王様は強く指を突きつけて命令をすると、そのまま部屋を出ていった。

部屋に残されたのは微熱休みの自分とただの静寂のみ。

時間は未だ出勤前とは言え、呑気に布団に入っている時間ではない。

だが現実として自分は布団に入らされている。

シャワーを浴びて覚醒したばかりの意識は「今更寝直すのはどうなのだ」と折角手に入れた休みなのに一抹の焦燥感をチクチクと与えてくる。

……いや、駄々をこねている場合じゃない。

魔王様の言う通り、そして体温計の指し示す通り自分は熱が出ているのだ。

風邪なのか何なのかは分からないがゆっくりと休養を取るべきだろう。

熱だと意識した途端に全身の気怠さもずっしりと増している気が

するし。

兎に角眠ろう。眠ってしまおう。

早く眠って。体を治して。仕事の遅れを取り戻して。

それで、それで魔王様に迷惑をかけたことを——……。

§ § §

会社帰り。自分はいつもの道を歩いている。

時刻はとうに日付を越え。街灯はちかちかと瞬^{またた}いている。

黙々と歩いて見えてきた帰宅先のボロアパート。

しかしそのアパートは、いつもと違って不自然な程に真っ暗だ。

軒先の電灯、階段を照らすライト、窓から見えるはずの暖かな光。

それらは失われ、暗闇が重く纏わりついている。

住まう存在など誰もいないようにも思えるその場所に、確信を持つて脚を進める。

階段を上がる。通路を歩く。扉の前につく。鍵を開ける。ドアノブを引く。

入り込んだその部屋は間違いなく自分の家だが、外の暗さと負けな位の闇で満ちていた。

部屋はスイッチを入れても明かりはつかず。

窓越にさしこむ街灯の頼りない光が唯一の光源になっている。

停電しているのだろうか？ ブレーカーが落ちているのだろうか？

いずれにせよ自分は電気のこととはあまり気にしていなかった。

なぜなら帰宅して一番気がかりだったのは、我が家の同居人であったから。

彼女におかえりを告げないといけない、ただそう考えて家の中を探し回る。

居間は見渡せど誰もいない。自室を覗けど人の形跡はなく。

トイレのノックは返事もなくて。風呂場はただただ沈黙で満ちている。

おかしい。どこか外に出かけているのだろうか。

いつもなら少しぶつきらぼうに自分の事を迎えてくれる筈なのに。そこまで考えた所で、はたと違和感を覚えた。

——ああ、自分は何を言っているんだ。

同居人なんて誰一人いなかったじゃないか。

自分は一人暮らしで、ここ5年はずっと一人で過ごしていた。

この場所におかえりを言ってくれる相手は居なかった。

この場所に一緒に食事してくれる相手は居なかった。

この場所に映画を見たり、ゲームをしたり、馬鹿話をする相手も当然居なかった。

そもそも誰を探していたというのだろうか？ 彼女とは誰だ？

居もしない相手を探して回るなんて疲れているに違いない。

そこまで思い立った所で、自分がソファに座り込んでいる事に気がついた。

TVのリモコンはスイッチを押しても一向に反応せず。沈黙を続けるだけ。

それなのに自分はそのモニタをじーつと眺めている。

着替えもせずに。夕飯も食べずに。ただただ呆然と。ぼうぜんひたすらに。

いつも隣に居た筈の誰かの感触が無いことに寂しさを覚えながら。

そしてこうして待っている間に誰かが声をかけてくれる事を期待しながら。

さながら、誰かが拾ってくれることを期待する、捨てられたおもちゃのように——

——気がつけば部屋は明るくなっていた。

朝——ではない。窓からさす日差しは茜色に染まり、近所の学校の下校アナウンスが遠巻きに聞こえてくる。天井を見ているはずの視界はどこかぼやけ、全身に溜まりすぎた熱が鬱陶しかった。

肌着は汗をたっぷり吸って重く、眠る前にはなかった額の濡れタオルは体温ですっかりとぬるくなっている。それは顔を動かした瞬間にべちりとベッドに落ちた。

どうやら寝込んでいる間に熱が上がってしまったようだ。

身体が重い。息が無駄に熱を持って暑苦しい。

全身はじつとりと湿っているのに喉だけはからからに乾いている。先程の悪い夢のせいで動悸すら怪しく、被さった布団を剥ぎ取るのすら億劫だった。

喉を、いや。そんな事はどうでもいい。

魔王様は、あの人は本当に居るのだろうか。

あの夢のように全てが自分の幻なのではないか。

そう考えた途端に全身が底冷えするように震え、胸が強く締め付けられてしまう。

兎にも角にもまずは彼女を探さねば。

そう考えてがばつと飛び起きれば――同じ部屋の中に魔王様がいらつしやる事に気がついた。

いつものTシャツ（今日は古いロボットアニメのTシャツだ）ジーパンスタイルの彼女は部屋の椅子に浅く座りこみ、背中を大きくもたれかけさせ、胸の下で両腕を組んだ姿勢で目を瞑っている。

長く、ゆるやかな息遣いと共に頭を揺ら付かせて寝入る彼女の姿は珍しいが、その珍しさ以上に居てくれた事に嬉しさと安堵を覚えて仕方がない。

ああ。居てくれてよかった。本当に良かった。

心の底からそう思い、胸を大きく撫で下ろす。

心中で燻っていた黒い靄は払拭され、現金なもので胸の痛みはもう無くなっていた。

そうして目下の不安が無くなれば、次は乾いた喉を潤おしたくなってしまう。自分はしばらく満足するまで彼女を視界に収めた後、そのままベッドから這い出る事にした。

最初は声をかけるべきか迷ったが……やはり寝入ってる彼女を起こすのも申し訳ない。ふらつく身体でえっちらおっちらと部屋から

出て、牛歩の如きスピードでようやく冷蔵庫までたどり着いたのだが……その時に棚に脚を引つ掛けて音を立ててしまう。

しまった。魔王様を起こしてしまっただろうか。

冷蔵庫の前からちらりと後ろを伺えば、懸念した通り部屋と居間の境からひよこり、と魔王様の顔が丁度覗き込んできた。

彼女の顔は微睡み模様。しかしてその目が自分の顔を捕えれば限界まで見開かれ、次の瞬間には目と鼻の先まで間合いを詰められていた。それこそ瞬間移動と思うくらいには早かった。

「起きてちゃ駄目だろ、どうしたっていうんだ？」

いや、喉が渴いたので何か飲もうかと……あと魔王様近いです。感染りますよ。

「そうか喉か……分かった。それならお前はまずそこに座つてろ。オレが全部用意するから」

魔王様に支えられ、言われるがままにソファまで誘導される。

ぐつしよりと汗を吸った肌着越しでも背中に添えられた手の温度差がどこか心地よく。

クツシヨンに体重を預けて息をついた所で。魔王様がどたどたと冷蔵庫まで走り出すのが見えた。

「水がいいか？ ジュースか？ あ、お酒もあるぞビールに、チューハイに、ワインに」

お水で。

「遠慮するなよ、好きなのを飲んでいいんだからな？ 高めのビールでもいいぞ？」

遠慮してないです。

あと魔王様はお酒に信頼を預けすぎです。

「そうか分かった」

冷蔵庫が開く音。製氷室から氷が取り出される音。

コップに氷が放り込まれる小気味の良い音と、注がれた水で氷が割れる音。

一連の音を聞きながらぼうつと彼女を眺めていると、ほどなくしてコップが手渡される。

水で急速に冷やされつつある硝子の感触が気持ちいい。

水分に飢えた身体が急ぎコップを煽ろうと急かしてくるが、その動きがたどたどしかったのだろう。ソファには座らず、すぐ近くで見守っていた魔王様が重ねるようにして手を添え、飲むのをサポートしてくれた。

「……苦しそうだな」

飲んで一息ついた魔王様の手が、またもおでこに覆いかぶさる。

濡れ布巾を被せられたかのような開放感に思わず安堵の息を漏らせば、次は首筋に手を当てられる。そして次は肩、次は腕と。とにかくべたべたに。

何でこんなに触れてくるのだろうかと思議そうにしていると、魔王様ははたと何かを思いついてその場を離れ、そしてすぐに戻ってきた。手にしているのは一般的な冷湿布だ。

是非も聞かれずに頭部にそれが貼られる。火照った頭部に冷たすぎる程の湿布は声が出そうになるが、喉元を過ぎれば気持ちが良い。

そんな自分の態度にホツとした様子を見せた魔王様だが、またもはたと思いついたのか忙しくその場を離れ、そしてすぐに戻ってきた。手にしているのはタオルだ。

これまた是非も聞かれず汗をかいた自分の顔や首筋が拭かれている。汗が拭われるのは確かに嬉しいが服を無言で脱がすのは辞めて欲しい。流石にそこは自分で脱ぎますと強い口調で言えば、少し不満そうな顔をした彼女はそつとタオルを手渡してくれた。

少々の恥ずかしさを覚え彼女の前で浚々汗を拭っていると、また魔王様はどたどたと慌てた様子でその場を離れ、そしてすぐにまた戻ってくる。その手に持っているのは毛布だ。

冷やしすぎるのもアレだと考えたのだろう、魔王様は自分の膝に毛布をかけ。そしてまたじつとコチラを見守り始めた。

正直……凄くやり辛い。

世話をされるのはとても嬉しいが、ここまで甲斐甲斐しくお世話をされる程の病状ではないと思っている。

なので感謝の言葉ともう大丈夫だ、後は放って置けば治ると伝えた

のだが、言葉だけでは満足行っていないのか依然として心配そうに眺めるばかり。これでは調子が狂って仕方がない。

「あ。あ。そうだ薬。薬がいるな。風邪っぽいんだよな？　風邪薬でいいんだよな？」

落ち着く様子もなく、またもその場を離れて薬を取りに行こうとする魔王様に流石にストップをかける。

色々と面倒を見てくれてありがたいがそこまで心配する必要はない。

風邪を引いた時はポカリでも飲んで、水を飲んで。そして寝る。そうすれば治ると言う経験則が自分にはあった。だからそこまで慌てなくてもいいのだと改めてお伝えしたのだが……そんな自分の発言も虚しく。魔王様は自分の手にたつぷりの薬剤を握らせてくれた。

風邪薬。胃腸薬。頭痛薬。ビタミン剤に漢方薬。掌から零れ落ちる程多種多様な薬。

また直ぐ側で待機している魔王様にじと目を返せば、流石に彼女も過干渉であることに気付いたか、しゅんとなつて縮こまり始めた。

彼女は始めこそ床と自分に視線を行ったり来たりさせていたが、やがて視線に耐えかねてぽつぽつと語りだす。

「だって。だってさ……時々お前の様子眺めてたけど、お前、寝てる間にどんどん息荒くなつて、うーうーって言ってたし……」

どうやら自分はいきなされていたらしい。
熱が上がってしまったのが原因だろうか。

「でもお前の事を起こす訳にはいかないし……おでこ触れたらいつもより全然熱いし……でもオレに出来る事って言ったら濡れタオル変えるぐらいしかなくてさ……」

膝立ちになり、うつむきがちに語るその言葉は、いつもと違って非常に弱々しい。

膝に置かれた彼女の手は握りしめられ、そして震えていた。

「人間は予想以上に強い。でもそれ以上に脆い事はよく知ってる……どれだけ強い戦士もつまらん怪我や流行り病で呆気なく死んだりする。だからお前が死んだらどうしようって思ったら、どうしようもな

くなつて……」

今にも泣き出しそうな魔王様の様子は見ているだけで胸が詰まっ
てしまい。気が付けば自分は彼女の肩に自らの手を置いていて。

魔王様は肩に手を置かれたただけだというのに叱られた子供のよう
に肩を跳ねさせ、そして力なくこちらに顔を向けてくれた。

普段とは打って変わって、その自信などどこにも見当たらない表
情。

その双眸は少しだけ滲んでいるのがはつきりと分かった。

「ごめん、ごめんな。オレは破壊の事ばかりしか考えてなくて、回復
魔法を覚えてなくて………クソお」

悔やみに悔やむ魔王様に適切な言葉は思いつかない。

だがこれだけは確実であるという事が2点ある。

魔王と呼ばれた彼女が優しい人物であるという事。

そして彼女がここまで悔やむ必要がないという事だ。

自分はこの瞬間、魔王様に対して深い深い感謝の念を抱いた。

だがそれと同じくらい、魔王様に心配をかけすぎた自分への苛立ち
も抱いていた。

だからだろうか。そんな魔王様をどうにかしようとしたくなつて、
自分は余りにも突飛な事をしでかしてしまった。

泣き出しそうな魔王様の目の前でやにわに立ち上がったと思えば、
ソファの上で思い切りラジオ体操を始めたのだ。

大きく腕を上げて動かし、腰をひねったり、屈伸をしたり。

馬鹿みたいに声を跳ね上げてそれをやるものだから、魔王様と来た
らぽかんと大口を空けてこちらを眺めるばかりだ。

気が狂ったと思っているのだろう。実際そう思われても仕方がな
い事をしている自覚はある。

だがその時の自分はどうかして悲しげな魔王様の顔をやめさせ
たかった。

他にももつと良い手段があつたのだろうに、頭が茹だつていたせい
かこんな変な事しか思いつかなかつたのだ。

「お？ おお…お、おいお前どうしたんだ!？」

困惑の表情を見せる魔王様にラジオ体操を続けながら返答する。
心配をかけてごめんなさい。でも自分はこんな事が出来るくらいには大丈夫。

魔王様が色々と気にかけてくれたお陰で多分すぐに回復するだろう、なんて普段以上に声をあげて強気に振る舞った。

「嘘つけ！　　というか動くのやめろっ、そんなフラフラで動いたりしたら」

大丈夫ったら大丈夫、と強気で押し通す。

体は全身に鉛を背負ったみたいに重くて、頭はガンガンと痛みを発するが大丈夫なのだ。

魔王様の看病を受けた自分は、高速で治りかけているに違いない。
「わ、分かった！　分かったってば、お前は治りかけてるのは認める！
だから頼むからこんな所で」

慌てふためく魔王様の前で、よせばいいのに調子に乗って跳躍した。

その結果、自分は案の定脚をもつれさせてバランスを崩していた。
重量に従って落ちていく体。でも予想していた衝撃は訪れはしなかった。

「言わんこっちゃないだろ!？」

気付けば朝の時のようにお姫様スタイルで抱えられていて、目と鼻の先で怒鳴られてしまう。

これは恥ずかしい。そしてすみませんしか言えない事態だ。

でもそこをあえてぐつとこらえて、それでも自分は治りかけていると頑なに主張すれば、軽く頭突きをされてしまった。痛い。

「どこがだ……生まれたてのゴブリンみたいな動きしてさ」

馬鹿め。馬鹿め、と何度となく痛くもない頭突きをされながらそのままベッドまで運ばれる自分。

結果として魔王様の悲しむ顔は見えなくなったが、代わりに待っていたのは怒り顔。

これじゃ何のために馬鹿をしたのかが分からない。

……もう羞恥とかそういうのはとりあえず置いておいて謝ろう。

ベッドに横たえられたのに合わせて口を開こうとしたが、機先を制したのは魔王様の方だった。

「……わざわざあんな虚勢張ってさ。余計オレを心配させてどうするつもりだよお前は」

自分の謝罪の言葉は、被せられた彼女の声音にかき消され。未だ体温の残る布団越しに見る世界は、贅沢にもほとんどが傍に座り込んだ魔王様で占められる。

最初は怒っているように思えた。だが一見して不貞腐れたその表情には少しばかり照れが含まれている事に、気が付かない訳がなかった。

「でもなオレの治療が本当に無駄じゃないっていうなら……本当に治りかけだって言うんならさ。そんな病氣すぐに治さないと怒るからな……これは命令だぞ」

魔王様の白磁の肌には薄っすらとした朱がさしており。

平時よりも優しく頭を撫でられた自分は大人しく首肯していたのだった。